第２８回　軽井沢２２世紀風土フォーラム基本会議

【日　時】　令和４年６月６日（月）　１９：００～２１：００
【場　所】　軽井沢町公民館　講義室
【出席者】　基本会議委員：石山武委員、稲葉俊郎委員、金山のぞみ委員、
鈴木幹一委員、袖山尚委員、福原未来委員、
鹿ノ戸彩委員、小出恵委員、三島勇委員

内　容

１．開　会
【事務局】
第４期初回の会議である。10 名２年間ということで委嘱している。Ａ委員、Ｄ委員には継続してお務めいただいているが、８名には新たにお務めいただくことになった。初回の会議ということで藤巻町長も出席しているが、本来であれば委嘱書を手渡しすべきところコロナ禍を鑑み割愛する。

２．藤巻町長あいさつ
【町長】
第４期のスタートである。忙しい中出席賜りお礼申し上げる。２年間よろしくお願いしたい。公募３名、知識経験者７名の総勢１０名ということで進めていく。先の第３期までの風土フォーラム基本会議は様々な形で進めてきた。それぞれの知識を出してきた第３期までの流れであるが、そのまとめとして昨年大賀ホールでシンポジウムを開催した。
この風土フォーラムの活動は、高校の教科書に紹介されている。『持続可能な地域づくり』ということで９ページにわたり軽井沢のことが紹介されている。課題も含めて様々なことが書かれているが、教科書に取り上げられるというのは、

こちらからお願いしたりＰＲしたりして出来ることではないので、大変嬉しく思っている。３期に渡り行われてきた風土フォーラムが、地域づくりの１つの例として採用されたものと思っている。軽井沢高校もこの教科書を採用するとのことである。皆様にもぜひご覧いただきたい。これから２年間よろしくお願いしたい。

３．自己紹介

【事務局】

初めての顔合わせとなるため１人ずつ、持ち時間３分以内を目安に自己紹介いただきたい。

【Ａ委員】

第２期から委員を務めている。軽井沢との関わりのきっかけは別荘である。自宅はつくばにあるが、年間３０～４０日は軽井沢に滞在し、癒しを得ている。別荘の住民ということで、軽井沢のいろんなまちづくりにあたっては外からの目線も大事だと考え、この委員を引き受けている。多様性があること、未来志向の議論であることなど、風土フォーラムは素晴らしいものだと思っている。第４期ということで気持ちを新たに、新しいメンバーと共に、今の軽井沢やこれから軽井沢のことを考えていきたいと思っている。よろしくお願いしたい。

【Ｂ委員】

２年前に軽井沢に来て、現在、軽井沢病院の院長を務めている。軽井沢には素晴らしい所がたくさんあると思っている。軽井沢は自然を中心にして社会や町を作っている。そういった哲学が素晴らしい。その哲学をぶらさないようにこの会議も進めていくことが出来たら良いと思っている。オリジナルのお薬手帳を制作しているが、これは軽井沢が“屋根のない病院”と言われたことに感動して始めた企画である。ヒエラルキーではなく、皆が対等に、それぞれを尊敬することができる社会、人々が対等に出会える場を作りたいという思いが、この企画にはこもっている。医療・芸術・福祉が出会えるものでもある。北欧に比べると日本はそうした文化に遅れがある。そういったところを軽井沢がいち早く学び、実

践していけるよう尽力したい。

【Ｃ委員】

中軽井沢において数年前からスキンケア商品の企画販売と、家業である不動産業の仕事をしている。生まれも育ちも軽井沢であるが、仕事以外にも青年会議所や中軽井沢エリアデザインの活動に携わっている。仕事柄、別荘所有者と関わることも多いので、多角的に意見を出せたら良いと思っている。

【Ｄ委員】

軽井沢とのつながりは四半世紀前の別荘購入に始まり、それから東京と行き来をしている。東京の赤坂と軽井沢、半々のような生活である。町内ではリゾートテレワーク協会や観光協会などと関わっているが、最近は福井県との連携協定などもあり、福井県へも月２回ぐらい訪れていて、三拠点生活にて、ワーケーションを実践している状況である。今期のメンバーは今までにないフレッシュな顔ぶれで楽しみにしている。

【Ｅ委員】

生まれも育ちも軽井沢で、大学や就職で県外にいたこともあるが、これまでの人生のほとんどは軽井沢で生活している。軽井沢は特殊で、家や商店が密集しているところもあれば、自然の豊かさもある。観光地もあれば、別荘地・静養地もある。なかなか１つにまとまらないものがある。また、中には人が集まることを良しとしない人もいると思う。そういった様々な要素があるため、方針を決めるのが難しいこともあると思うが、軽井沢のことが大好きである。よろしくお願いしたい。

【Ｆ委員】

６年前に軽井沢に引っ越してきて、ボードゲームのお店とプログラミング教室を営業している。軽井沢町に創業のきっかけを貰ったという経緯がある。現在は社会教育委員、男女共同参画推進委員、中学校の評議員等を担うかたわら、高齢者向けに認知症予防の講座なども行っている。遊びや学びを通して関わる中

で、まちづくりと言うと、いろんな人の意見を聞きながら解決しないといけない課題があったり、１つの局面で解決できるものは少なく、横断的に解決しなければならないことが多いと感じている。基本会議はいろんな方と交わりながら解決に向けていける場だと考えている。

【Ｇ委員】

これまでに新聞記者を 30 年、法務省で国家公務員を７年、大学職員を２年、という形で務めてきたが、この３月に任期を終え、現在は佐久のＮＰＯ法人に勤務している。軽井沢に来たのは４年前である。これまで世界中も日本中も回ってきたが、その中でも素晴らしいと感じたのが、ノルウェーのオスロ、軽井沢の２ヶ所である。長きに渡りエネルギー問題、環境問題に関わっている。軽井沢町においては、『ピッキオ』のクマ発信機の企画を新聞で知り、良いものだと思った。軽井沢が日本で１番良い町であって欲しいと思う。皆さんと一緒に軽井沢をさらに良くしていきたい。軽井沢が良くなれば、自分が住んでいる場所が良くなる。私の力が少しでも役立てばと思う。

【Ｈ委員】

展示イベントの企画により仕事で『油屋』に来ることになったのだが、長野県も軽井沢町も好きである。当時９歳であった息子も連れてきたのだが、息子としなの鉄道に乗っている際に、「（空気が）気持ちいい。ここ（軽井沢）で暮らす」と言った。その時は特に真に受けなかったが、２年後に、また仕事で軽井沢に来た際に、新しい中学校が設立されるということで、中学から軽井沢の学校に通う、ということになり軽井沢町での生活が始まった。来てすぐに、ＦＭかるいざわの企画に参加した。その企画では、子どもを主体にして地域の中に巻き込まれていくということに、すごく面白みを感じた。そうした中で、子どもたちの故郷を未来に向けて繋げていきたいなと思っていたタイミングで、風土フォーラム委員の公募があり、ぜひ参加させていただきたく手を挙げた。

【Ｉ委員】

幼少の頃から、週末に家族と軽井沢で過ごしていた。軽井沢では、リモートワ

ークを行ったり、飼っている犬（老犬である）が軽井沢に来ると元気になったりすることもあり、自分にも犬にとっても良い環境であることから、居住をスタートし、現在は追分に定住している。経歴は、出版社で書籍の編集をしていたが、その後フリーランスとなり、現在はライター・編集者としてＷｅｂで記事を作成したり、パンフレットの作成などを行ったりしている。メイン業務は旅行のガイドブック制作で、直近では和歌山県田辺市と協力し、熊野古道の新たな魅力を発見して旅行者へのＰＲを行うなどの仕事をした。地域の新たな魅力を地域の方々と発見して発信する、という経験を、自分の住んでいる大好きな軽井沢町でも生かせないかと思い、風土フォーラム委員に応募した。

４．会長・副会長等選任

【事務局】

要綱により、会長・副会長を委員の互選により選出をお願いしたい。

【Ａ委員】

第３期会長を担った、自身の経験も踏まえて２点話をしたい。

議論を行うにあたっては、その内容を住民目線で見た場合に乖離がないか、ギャップがないかどうか、ということを常に気にした。世の中も大きく変わるし、軽井沢も変わる。１つ目のポイントとしては、そういったことを身近に感じていただける方が良いと思う。そうなると皆さんどなたが会長を担っても良いかと思う。

２つ目のポイントは、今回は委員に若い方が多いということで、年代や性別は関係ないと思うが、今回は思い切って若返りを図っても良いと考える。この会議体を外から見た場合にも（若い世代が活動していることが）分かりやすいし、議論にも新しい発想が出てくるものと思う。第３期まとめのシンポジウムの際も、高校生から非常に良い意見が出た。そういった２つのポイントから人選したいと思う。

【Ｅ委員】

青年会議所という団体を 40 歳で卒業するまで、Ｃ委員と一緒に活動していた。

自分と大きく異なる考え方の人を尊重して、そうした人と共に行動するというのは中々難しいことであるが、Ｃ委員はそういった部分の素地が出来ているので、会長としてふさわしいのではないかと考える。メンバーの一員としてＣ委員にも意見を述べていただくのはもちろんであるが、強いリーダーシップを発揮してくれることと思うので、推薦したい。

【事務局】
　承認いただけるようであれば拍手をお願いしたい。

≪拍手により、承認。Ｃ委員、会長席へ移動。≫

続いて副会長の選任をお願いしたいが、どのように取り計らうか。

【会長】
　会長への推薦に感謝する。先輩でもあるＥ委員を副会長に推薦したい。青年会議所の理事長を務めているほか、商工会の青年部や消防団、新軽井沢エリアデザイン等の活動にも携わっていて大変優秀な方である。ぜひ推薦したい。

【事務局】
　会長から推薦のあったＥ委員ということであるが、皆様いかがか。

≪拍手にて承認≫

　会長と副会長からそれぞれ挨拶をお願いしたい。

【会長】
　経験豊富な皆様を前に、僭越ではあるが２年間会長を務めてまいりたい。協力を仰ぐこともたくさんあるかと思うが、まとめ役としてしっかりと職務をまっとうできればと思う。よろしくお願いしたい。

【副会長】

副会長への推薦に感謝する。誠心誠意務めてまいりたい。副会長という立場とは別に、いち委員として意見はしっかりと述べていきたい。そのあたりをご理解いただきながら、２年間しっかりと努めていきたいのでよろしくお願いしたい。

【事務局】

今期のテーマに触れていきたい。第３期の基本会議においては、１期からの集大成として、住民の皆さんへ宣言を行ったものである。この未来宣言を受け、『軽井沢ブランドの持続と進化』という形で、事務局側にて予めテーマを設定させていただいた次第である。

会議を運営していくにあたっては、合意形成、相互理解を深めるため、これまで各種活動やイベント等に携わっているＦ委員に円滑な議事進行を含めたファシリテーターをお願いしているので、皆様了承いただきたい。

≪Ｆ委員、会長の隣の席へ移動。ホワイトボードへの板書を開始。≫

５．議　事

要綱に基づき、議事進行を会長にお願いしたい。

【会長】

議事を進行する前に、Ｅ委員よりファシリテーターとしての役割、概要について説明をお願いしたい。

【ファシリテーター】

中軽井沢エリアデザインでファシリテーターを務めている。より活発に議論を進めるために、ホワイトボードを使用し、意見を“見える化”しながら進めていきたいのでよろしくお願いしたい。

【会長】

最初に、今期のテーマについて藤巻町長からお話をいただきたい。

○ 今期テーマ「軽井沢ブランドの持続と進化」について

【町長】

お配りした資料は私のブランド観のほんの一部である。『ブランド』とは幅が広く奥の深いもので、わかったような、わからないようなものであるが、非常に大事なものであると思っている。ましてや軽井沢は１つのブランドになり得る都市であるので、いろんな角度からご検討いただきたい。私は『ブランド』を一言で表現するときに『憧れ』という言葉をよく使う。『憧れ』がなくなった時には軽井沢は軽井沢ではないと思っている。資料はほんの一端であるので、皆様の想像を引き出すきっかけとしてご覧いただきたい。

軽井沢は“外の人”によって作られてきた町だと考えている。ショーハウスが建てられてから 130 余年が過ぎた。それより前にも軽井沢という場所は存在していたが、Ａ．Ｃ．ショーという外国人宣教師が見出してくれたということが決定的なものであり、これが幸運なスタートであったと考える。この度、福井と提携することになったが、八田別荘なども“日本人が別荘を建てた”という事実もあるが、“外国人宣教師が見出した軽井沢”というイメージの方が未来永劫、常に語られていくわけである。その後、政財界や文化人が町に訪れ、いろんな作品を生みだした場所でもある。皇室が軽井沢で静養をされてきた、という事実も日本中に発信され、軽井沢が“特別な場所”というイメージが日本人の中に作られた。これも大きな効果である。このように知名度を築くには“外の方たちの力”が決定的であったということである。

『ブランド＝良いもの』という認識である。ブランドは常に、『知名度』と『イメージ』がセットとなっていると思う。イメージが良くても知られていなければ意味がない、知られていても悪いイメージでは意味がない。文化でのイメージ戦略として考えているのは、松江市の例で、松江市というと小泉八雲がすぐに出てくる。これによって松江を全国に売り出しているという感じがする。しかし、小泉八雲は実際には１年半に満たない期間しか松江にはいなかったという事実がある。それであっても、小泉八雲をうまく戦略として徹底的にＰＲに使っている。大河ドラマなどで戦国武将が主人公となり、その“戦国武将ゆかりの都市”で売り出しがされることがよくあるが、武将ではどうしても血生臭さが無意識のなかに出来てしまう。例えば、小諸市であれば、牧野の殿様ではなく島崎藤村を打

ち出していて、それが良いイメージとなっていると考える。そのイメージがもっと上がっていけば良いものになると思う。

ブランドは常に磨かないと忘れられてしまう。積み重ねていかなければ過去のものになってしまう。今日の軽井沢の憧れというと、別荘ライフである。これまで様々な形で別荘ライフが紹介されてきて、それが軽井沢のイメージを作ってきた。これからの理想は、軽井沢に生活している人のスタイルそのものが憧れの対象となるような、そんな町にしたい。地に足の着いた生活、自然を愛し、友と語ったり、家族と語ったりすること。寒冷地であるので、石油を焚くのではなく薪ストーブで暖をとるなど、そういった生活そのもののブランド化である。

【会長】

委員の皆様の意見を伺いたい。１人ずつ順番に伺いたい。

【Ａ委員】

未来宣言の中にもあるが、ブランドのイメージ、軽井沢のイメージは、伝統的・歴史的なものと、それに伴う文化的な価値によって質の高さが保たれていると感じる。明治時代に外国の方が持ち込んだ文化を地元の方が一緒に作り上げてきた、ということに価値があると思う。歴史・文化・自然が一体となったもの、なおかつ、先端的なものを取り入れて、ライフスタイルや文化の生まれ変わりを行おうとする、そういったイメージが軽井沢にはある。

【Ｂ委員】

外国人宣教師の方は全国いろんなところにいたと思うが、軽井沢に根付いたということは軽井沢の人々が排他的ではなかったことが大きいのではないかと思う。海外のものを取り入れようという意識が、こういった文化を生んできた。日本には優れているところもあるが劣っているところもある。軽井沢は新たな文化を受け入れやすい土壌があるのではないかと思う。新たな取り組みを実践するには最適な場所なのではないか。

自己紹介でも述べたが、自然がベースになっているということが軽井沢の大きな魅力である。人間は誰かに肩入れし偏りを持つものだが、自然は中立で、そ

の自然を中心に据え、物事を考えてきたことに価値があると思う。多様なものを受け入れる姿勢と、自然を中心に据えて人々が生活するという哲学が素晴らしく、それが大切である。

【Ｄ委員】

行政でブランドを作るというのは難しいイメージがある。企業の場合とは全然違う。企業の場合は、よく変化する。養命酒を例に挙げると、昔はターゲットが年配であったがある時に若い女性にターゲットシフトをした。そうすることで企業価値も大きく変わった。民間企業の場合はブランド価値や企業理念を比較的柔軟に変えていくことができる。しかし行政の場合は、いろんな人が関わっているため「こうだ！」と一言で言えない。そんな中、軽井沢らしい“共通項”というと藤巻町長も仰っていた、外から来た人が地元の人と交わる『寛容性』があって『外から来たものを拒まない』というのが特徴であると思うし、それに伴って学びを行う町だと思う。これから行うブランドについての議論のキーワード、ヒント、の１つとして『寛容性』がある。お互いに尊重しあって、という寛容性、それと『お互いに学びあう』こと。軽井沢は夏期大学など学びのチャンスが多いし、新しいものも積極的に取り組んでいる。このあたりがポイントと思っている。企業のブランド価値と、行政のブランド価値は意味合いが違って難しい。若い人の活発な意見をどのように聞きながら議論を深めていけばよいか、考えているところである。

【副会長】

ブランドは目に見えないもので、藤巻町長の『憧れ』というキーワードに共感した。明治時代からの流れを考えると、当時の外国人、西洋人にあとから日本の文化人がついてきて、その次に流行に敏感な人がついてきて、さらにその後に大衆がついてくる。そして、大衆が来ると、一番先に来た人が逃げてしまうという現象が起きる。例えば、京都はそのサイクルにきちんと対処しているのではないかと思う。軽井沢の多くの人が持っているイメージは『自然』『緑』『きれいな空気』『人との関わり』だと思う。しかし、そのどれも今は低下してきていると思う。イメージを損なっても離れてもいけないし、出来ればイメージを超えていか

なければいけない。それが『憧れ』につながるのではないかと考える。

【G委員】

副会長の意見で、「自然と人との関わりが減っている」というのが心に響いた。自身は、軽井沢には浅間山という自然の象徴的なものがありながら都会的なところもあり、それが良いなと思っていた。軽井沢の良い所を残していくには何を変えなければいけないのかなと考えた。軽井沢の良い所はブームを変えないところである。他市町村にはかつて人気を博して栄えた町があるが、今見ると、どうしてしまったのかなと思ってしまうような場所もある。一度そういったレベルまで寂れてしまうとなかなか立ち直れない。やはり観光だけではブームが終わってしまえば衰退してしまう。軽井沢は観光だけではない。別荘もあるし、住民も増えていて、他の町と質が違う。ブランド力を生かしていくためには、自然をより大事にしていくことが重要であると思う。軽井沢の良い点を残しつつ、新しい取り組みを進めていけたら良いと考える。自転車など、他の町で行っていない取り組みをどんどんやって欲しいと考えるし、その取り組みには自然が関わってくるものと考える。

【H委員】

軽井沢のブランドを考えるにあたり大事に出来たらいいと思うキーワードは『豊かさ』で、それは金銭的・経済的なもののみならず、『リソースそのものの豊かさ』のことである。それはつまり『品の良さ』である。それも気品ということではなく、例えば、浅間山の存在感があり、そうした場所に宣教師がきて静養地として見出したという事実が、説明ではなく軽井沢の空気で直接感じることが出来る、そういうことである。そうした品位が磨かれていないと落ちていって汚されてしまう。『豊かさ』と『品を保つ』それらを磨くということを考えながらブランド化していけたらと思う。

【Ｉ委員】

ブランドを考えたときに、一番大事だと思うのが、その背景に『どれだけストーリーがあるか』ということだと思っている。手前みそだが、自身の仕事でもよ

く「物が売れない」「魅力が分かって貰えない」という話からスタートし、その背景を掘り下げ、それを守るのにどれだけ苦労しているのかということなどをしっかりと伝えていくことができると、高く売れたりする。そうした『背景やストーリーを伝えていく』ことによって、良いイメージやブランドが形成できると思う。『憧れ』があっても、それがだんだん古いものになってきてしまうことがある。なので、それをどうやって守っていたり、関わっている人がどういう思いで守っていたりするか、などを掘り下げていくと、ブランドを守っていけるのではないかと考える。

【ファシリテーター】

「自然」や「別荘文化」「都会的なイメージ」は皆が感じているが、それらが具体的にどういったものなのかと言えば、住民間でもギャップがあると思う。どれが自然で、どれが軽井沢のイメージなのか、それぞれに思っている、考えていることが違う。その意識合わせを住民の皆さんと一緒になって話し合いが出来れば良いと考えている。自然と言っても、景観のことなのか、自然保護のことなのか、どういうものなのかということもあるし、都会的なものについても、例え便利なものでも、その土地にとっては良くないこともあり得る。どのように受け入れ、どうしていくのか、そういったものを考える場が作れたら良いと考えている。

【会長】

他の市町村が人口増加を目的として動いている中で、軽井沢は違う。だから『軽井沢ブランド』という考え方が出てくる。青年会議所でも各国の会長候補を呼んでリーダー研修を行ったことがあり、その実行委員長として７か国にＰＲにまわった経験がある。その際に、アジア圏の国々においては『軽井沢』が通じるのだが、その他の国にあっては『軽井沢』のネームバリューは浸透していない。しかし、実際には観光客は多い。数値的に見ると、世界的にはハワイなどと同レベルである。ということは、戦略が合致すれば、ハワイのようなリゾートにもなり得るのではないかと思っている。ハワイについて調べたら、『自然』『文化』『観光』『コミュニティ』という４つを大事にしているということが分かった。『憧れ』

の町にするためには、この４つのバランスが大事だと思う。先ほどファシリテーターからあったとおり、軽井沢のあるべき姿の意識合わせを住民の方と行うべきと思うが、この風土フォーラムの着地点について事務局から説明いただきたい。

【事務局】（資料に沿って説明）

【会長】
事務局からの説明があったが、今期の基本会議の終着地がどのような形が良いか、意見を伺いながら決めていきたい。未来宣言も、ここまでにいただいた意見に通ずるものもあると思う。アイデアがあればぜひ意見を頂きたい。

【Ｂ委員】
２２世紀という未来を語るうえで、その時代を生きる当事者となる子どもたちの意見を最大限取り入れ、子どもたちの未来を最大限尊重していきたいと考える。子どもと対話をし、そして軽井沢の未来を引き出していく、ではそれに対して今我々は何が出来るかを考える、そういった流れにしたい。

【会長】
Ｂ委員の意見に賛成である。軽井沢でこれから活躍していく子どもたちや、町外に出ていった方々にも軽井沢に帰ってきたいと思っていただけるようにするのが大事だと思う。

【Ｈ委員】
プロジェクトチームにあっては、Ｂ委員が提案されたような子ども向けの（子どもを巻き込んだ）活動をプロジェクトでやりたいと思うが、我々委員としてはどれだけこの基本会議のことを思いながら過ごせば良いのか。あるいは個人的な活動になるのか。委員としての動き方を確認したい。

【事務局】
　プロジェクトチームであるが、事務局として考えているのが、基本会議の分科会、というような位置づけである。ある特定のテーマが出てきたときに、小回り的に活動できるような組織体をプロジェクトチームとする形を想定している。基本会議が本体で、プロジェクトチームについては４名程度、６回程度の活動機会を予定（予算を踏まえ）している。

【会長】
　子どもたちに会議に参加してもらいたい、そのために時間を変更したい、といった場合、スケジュール調整に融通はきくか。会議の設定自体も、この会議内で決めて良いのか。

【事務局】
　土日はダメというようなルールはないので、委員の皆様で決めていただいて構わない。

【副会長】
　プロジェクトチームは現メンバー内で構成するのか。基本会議の外部からメンバーを入れることは出来るのか。

【事務局】
　可能である。

【副会長】
　子どもを交えての活動に賛成である。町のことに携わる中で、子どもたちの地元愛、郷土愛を養っていければと考える。ぜひ子どもを交えて進めていきたいという思いがある。

【Ｇ委員】
　“子ども”というのは何歳ぐらいを想定しているか。一言に子どもと言っても、

幼稚園のお子さんから、高校、大学まで幅がある。皆はどのような考えでいるか。

【Ｂ委員】

幼稚園児のように自由なイメージも聞きたいし、高校生などは現実的なところもあると思うが、それぞれの世代で思うところがあると思うので、すべての世代の意見・イメージを訊いてみたい。どういうところに住みたいだとか、どういう未来をイメージしているかなどである。

【会長】

スケジュールや関係者との折り合いがつくのであれば、“出張風土フォーラム”的に、幼稚園や学校に我々が出向いて基本会議をやるようなこともありだと思う。単なるイベントでは興味のある人しかそこには集まらないが、目的とする人がいる場所に出向けばそのようなこともないと思う。

【ファシリテーター】

子どもたちと共に行動するのかどうなのか、ということも考えて議論した方が良い。２年間は子どもたちと一緒に考えるという方向性で良いのか。土台作りということだと思うが、もう少し皆さんの意見を聞きたい。

【Ｇ委員】

『人生 100 年時代』と言われているが、全世代の意見を本当は訊きたい。80 代の方に話を訊けば歴史を分かったうえでの意見が聞けるし、子どもは子どもで柔らかく斬新な発想での意見が聞けると思う。学校や幼稚園に出向くのも面白いが、そうではない世代の方から、例えばアンケートなどでも良いので意見も伺いたいというのも個人的な意見である。とはいえ、それでは幅が広すぎて事務局が大変になるかもしれない。しかし、あまり焦点を絞るのも考え方に偏りが生じてしまう可能性があるので、どのように折り合いをつけるのかというところである。

【事務局】

アンケートという話があるが、既にアンケートを実施したデータがある。『未来の軽井沢』に向けてということで、第６次の長期振興計画を現在策定中である。そのためにアンケートを実施し、それらのデータが残っている。その中で自然や交通に関することなども、割合等のデータで出てきている。それらに加えて、“キッズコメント”として小学校５、６年生に意見を求めた。そこで出てきた意見を約１時間かけて読んでみたが、様々な意味で面白かった。「自然は残すが、イオンを作って欲しい」とか、「ゲームセンターは 100 円にしてほしい」とか、本当に様々な意見が出ている。そういったものも活用していただけるのかなというのがある。

また、昨年の 10 月からふるさと納税の返礼品を展開してきた。数ある返礼品の中でも人気があるのが宿泊券で、圧倒的な人気である。『モノよりコト』に人気が集まっている。返礼品の約８割が宿泊券のような“体験もの”である。軽井沢ブランドを考えるにあたり、そうした“モノではなくコト”に人気である事実も、情報の１つとしてお伝えしておきたい。

【会長】

アンケート結果の共有は可能であるか。

【事務局】

提示することは可能である。キッズコメントは現在まとめている最中であると思うが、可能である。

【会長】

そうした参考情報が頂ければ、次回以降の会議も議論が活発になると思うので、ぜひ提供いただきたい。

【事務局】

アンケートの対象としたのは、別荘所有者 2,000 件、首都圏に住んでいる軽井沢に全く関係ない人を無作為に選んで 1,000 件である。そうしたような中で出

てきたデータが示せるものと思う。

【副会長】

子どもにこだわった理由としては、子どものうちは軽井沢しか知らないので軽井沢の良さを知らないことにある。軽井沢の良さを知らないままに町外へ出ていってしまうことが大変勿体ない。なので、出来ればプロジェクトに参加して貰いたい。軽井沢のことを学んでいく中で、軽井沢を愛することが出来るようになるのかなと思う。まずは子どもたちを対象にしたプロジェクトの進め方にした方が良いのではないかと思う。自身がそうであったが、気候や空気、文化など、町外に出て初めて軽井沢の良さに気が付いたこともある。以前は町のことを愛するということが恥ずかしいことだと思っていたが、今は町のことが大好きで、いろんな人に触発されて軽井沢町が好きになってきた。子どもたちにも関わってもらうことによって、町をさらに良くしようと能動的に思えるようになるのではないか。

また、町民憲章についても、“町民の意識も高く”ということで、町民にもっと周知して貰いたいし、この憲章に記載のある内容に実際の町が少しでも近づけていけたら良いと思う。子どもたちにもぜひ周知したい。

【Ｈ委員】

ＦＭかるいざわのキッズメディアラボの活動の中で、子どもたちがどんどん町へ出ていって、どんどんいろんな発見してくれて、それが番組になっていった。小中高それぞれの企画であったが、それぞれにカラーがあってどれも面白かった。我々でそういった子どもに参画してもらうことの出来る機会を作り、子どもたち自らがやってみたい、となれば、波紋のように広がっていくと思う。なので、まずは触発することが大事ではないか。

【Ｂ委員】

これまでの風土フォーラムの経過を見たときに、良いアイデアだと思ったことが何個かある。南軽井沢で馬を使うアイデアや、車でなく自転車で行けるようなものを作るとか、そういった良いアイデアを実践しないのは勿体ないと思う。

今期の基本会議では、それらを実現させるための引き上げを行いたいと考える。

【会長】
プロジェクトチームを構成し、前の期のメンバーに参加してもらうのも手である。

【Ｄ委員】
前回の第３期の時の最後のシンポジウムで出た軽井沢高校の生徒のアイデアが面白く、多くの大人が触発された。あれは良い事例である。多様性の時代であるので、『子どものみならず大人と共に考えること』である。子どものイメージ半分、大人も子どももお互い尊重しあいながらお互いに刺激しあう、学びの場とするというのもあると思う。いろんなパターンが良いと思う。

【Ｇ委員】
コト商品に人気が集まっているということに関連するが、スイスなどに行くと自転車がたくさん走っている。車に乗っていても街中では自転車の団体を優先するような自転車文化がある。スイスで出来ることは軽井沢でも出来ると思う。日本で今までなかったような文化を先進的に取り入れていけば、ブランド価値が上がってくると思う。『コト商品の発想』である。軽井沢は欧米ではあまり名前が浸透していないとの話があったが、「軽井沢で何ができるの？」ということである。「自転車で楽しめる」ということが分かれば遊びに来てもらえると思う。子どもも高齢者も、皆が楽しめるようなコト商品、自然豊かな中で自転車を楽しんでください、というものが良いと思う。

【Ｈ委員】
軽井沢はほぼ自転車で生活できる。地元の人でも自転車で生活できることに驚くようなレベル（認識）であるが、そういうところからのスタートである。自転車で走る街並みも素敵である。

【副会長】
（自転車での生活に馴染みがないのは）昔の軽井沢は雪が多かったこともある。

【Ｂ委員】
（自転車で走行するには）道が悪いのが勿体ない。

【副会長】
日本人の中でも、軽井沢には西洋的な街並みのイメージがあると思う。自然と一体になった風景というイメージである。

【Ｈ委員】
自転車で走ると草花など自然が良く見える。

【ファシリテーター】
プロジェクトチームをどうするかというところ、２年間どうするか、次の会議でどうするか、などを決めていきたいと思う。アンケートの話やこれまでの風土フォーラムのアイデアの拾い上げ、軽井沢憲章のことなどいろんな話があったが、中でもこれが良いというのはあるか。軽井沢憲章については個人的にも良いと思うが、作られてから 50 年が経っていて、時代が変わってきているので、軽井沢憲章を今の時代や今の軽井沢に合わせて落とし込み、見つめなおすことも面白いと思う。

【Ａ委員】
『未来志向』ということで、子どもたちに軽井沢のこと、自分の町のことを知ってもらうこと、そういう機会は具体的に持った方が良いと思う。もっと自分たちの町を知ろう、ということである。自分の子どものころを思い出すと、あまりそういう（自分の町のことを知ろうという）意識はなかった。軽井沢のブランドイメージについていろんな話が出たが、子どもたちがどう思っているとか、軽井沢が好きかどうか、他の町と比べてどうか、良い所ってどこ、といった話をすべ

きと思う。

ブランドを考えるにあたっては、全体のイメージとして、どういう要素を扱っていくかという“イメージ合わせ”をするべきだ。第４期の役割は「具体化させる」ということであると考えている。そのためには、これまでの風土フォーラムの素材の中から決めていく、ということは必要であると思う。自転車など交通問題と兼ねながら考えなければいけないことであるが、もっと具体化していかなければいけない。『未来志向』と『具体化』が第４期における方向性と思う。

【会長】

まとめに入りたいが、次回の会議までに話し合える場があれば良いのだが、次回の会議で具体化していくとなるとスケジュールが押してしまう。

【Ｈ委員】

スラックみたいなものを使うのも良いのではないか。

【Ａ委員】

第３期では Facebook のグループを作成した。

【副会長】

チャットのような形で話が膨らませられれば良い。

【会長】

一旦、スラックにチャレンジしてみるということで良いか。子どもたちと何を話していくのか等をスラックで決めていきたい。

【ファシリテーター】

全てをこの基本会議内で行う必要はないので、この会議で何をするのか決めていければ良いと思う。

【会長】
一旦、子どもたちとのプロジェクトを進めるという方針に決定し、具体的に何を行うかについては、スラックを通して話を進めたい。

【ファシリテーター】
どこまで話を詰められるかがポイントだと思う。子どもたちは良い意見が出るのだが、そもそも大人側でしっかりと方向性が固まっていないと、話はうまく進まないと考える。

【会長】
次回の会議でシミュレーションを含め、子どもたちの巻き込み方について話し合いをし、そのさらに次の会議にて子どもたちを巻き込んだことを実施するということで良いか。

【G委員】
A委員の仰った課題で『軽井沢ブランドの持続と進化』というテーマが出ているわけであるから、過去の風土フォーラムからの洗い出しは具体的に行った方が良いと考える。

【H委員】
既に実践フェーズであり、いま洗い出し作業と分ける必要はないのでは、という気がしてきた。今期具体化することで、2年後の次の期に実績として手渡すことができると思う。

【会長】
軽井沢ブランドとは何なのか、ということと、子どもたちとどのように進めていくかをスラックの中で話を進めていきたいと思う。

≪次回の会議へ向け、本日の意見のとりまとめと連絡方法の整理を行うこととし、議論終了。≫

６．事務連絡

７．閉　会